

平成 29 年 8 月 7 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350077

研究課題名(和文) 西洋から見る19世紀後半の日本と朝鮮の伝統服飾に関する比較研究

研究課題名(英文) The Comparative Study of the late 19th Century Traditional Costume in Japan and in Korea from the Western Perspective

研究代表者

鄭 銀志 (Jung, Eunji)

県立広島大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：20398887

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究では19世紀後半の西洋人が当時の日本と朝鮮の伝統服飾についてどのように認識していたのかを明らかにすることを試みた。その結果、両国の上流層の男性服飾は、実用性より儀礼性を重視するものとして認識されていたことが明らかとなった。また、日本服飾では刺繍と帯が和服の美しさ表現する最も重要な要素と評価されており、朝鮮服飾では胸背と帽子が朝鮮の伝統性を表すものとして認識されていたことが究明できた。なお、両国の伝統服飾には西洋の宗教服飾の要素が混在すると理解されていたことが判明できた。さらに、本研究を通して、西洋人の視点から評価した日本と朝鮮の伝統服飾の長所と短所、服色の特徴を究明することができた。

研究成果の概要(英文)： This study reveals how late 19th century westerners recognized for the traditional costumes of Japanese and Korean. For this, journals of Japan and Korea travelers, and western newspapers were researched. By this work, Japanese and Korean men's costumes were focusing on ritualistic qualities than usefulness is revealed. Also, it is recognized that the Japanese Kimonos show the most beauties with embroidery and Obi, and the Korean costumes represent the traditionalism by Hyoong-Bae (Official Emblematic Square Badges) and hat. The western recognized Japanese and Korean costume as like western's religious costume. In addition, this work disclosed Japanese and Korean costumes' pros and cons, costumes' color comparison from the westerners' perspective.

研究分野：服飾文化

キーワード：服飾文化 日本服飾 朝鮮服飾 伝統服飾 民族衣装 比較文化 西洋観

1. 研究開始当初の背景

日本における西洋文物の受容は、日米和親条約(1854年)をきっかけとして本格化し、朝鮮の場合は、日本より約30年遅れて朝米通商条約(1882年)以後から始まる。この時代は日本と朝鮮ともに伝統社会から近代社会へと移り変わる時代であり、服装においても西洋服制の導入に従い、日本人と朝鮮人の衣生活に新たな変化が訪れる時代でもあった。

なかでも、軍服をはじめとする男性の服装は、西洋服飾の影響を最も大きく受けたものである。日本の場合、1870年から陸・海軍の軍服が洋装化され、1872年には文官の大礼服が洋服に代わり、その翌年には天皇や皇族の大礼服にも洋服が用いられるようになる。朝鮮においても、いち早く西洋文物を取り入れた開化派のなかでは1880年代から洋服を着用する人が現れ始め、朝鮮の近代改革運動と言われる甲午改革(1894年)以後は朝鮮国内での洋服着用が公式に認められるようになる。このような一連の変化のなかで、日朝両国の一部の知識層の間では、洋服を文明開化の象徴として認識する一方、自国の伝統服飾は旧時代を代弁するものと見做す傾向もあった。では、当時の西洋人たちは19世紀における日本と朝鮮の伝統服飾についてどのような見解を持っていたのであろうか。

本研究に関連する日本側の研究状況を見ると、「明治中期に日外国人の日本服飾に対する意識」(兵庫教育大学研究紀要(1992))の1件だけで極めて少なく、韓国側の研究も同様の状況である。

世界化が加速化されるなかで、自国の伝統文化としての伝統服飾(ここでは洋服が定着する前の日本と朝鮮の「歴史服:衣冠・官服など」と「民族服:和服・韓服」)を、他者(19世紀の西洋人)がどのような目線で認識していたかを明らかにすることは、自国の伝統服飾を継承・発展していく上で、意義のあることだと考える。

2. 研究の目的

本研究では、19世紀後半の西洋の人々が当時の日本と朝鮮の伝統服飾についてどのように認識していたのかを明らかにすることが目的である。

本研究の成果を通して、1)西洋人の視点から記した19世紀後半の日本と朝鮮の服飾関連の基礎的史料を収集・構築することができ、2)日本と朝鮮の伝統服飾が西洋人の目にはいかに映じていたのか究明できる。これらの研究成果は、伝統服飾の重要性を再認識するきっかけとなり、伝統文化としての民族服飾を、継承・発展・世界化していく過程で、一つの指針になれると考える。

3. 研究の方法

本研究で取り上げた研究資料は次のよう

である。

まず、日本側の資料としては、19世紀後半の日本に滞在した西洋人の日本見聞記録9種を選別した。その中の2種は日朝両国で滞在した経験を持つ人が記したものである。それに加え、西洋新聞(1854~1890年)5種(*The New York Times*, *The Times*, *Frank Leslie's Illustrated Newspaper*, *Harper's Weekly*, and *The Illustrated London News*)から日本服飾関連記事を抜粋し、分析対象とした。

次に、朝鮮側の資料としては、西洋新聞に掲載された朝鮮服飾関連の記事が非常に少なかったため、上記の5種の西洋新聞から一部の関連記事を取り入れながら、主として19世紀後半の朝鮮滞在西洋人が記した朝鮮見聞記録10種を分析対象とした。その中の2種は日朝両国で滞在した経験を持つ人が書いたものである。

研究方法として、上記の研究資料に、当時の写真やイラスト資料を加え、精査・分析した上、まず、日朝両国の資料に共通項目として記されていた1)西洋人が認識した日本と朝鮮の男性服飾、2)西洋人が認識した日本と朝鮮の女性服飾、3)西洋人が認識した日本と朝鮮の服飾の長所と短所、4)日本と朝鮮の服色について考察した。

次に、日本側の資料から読み取れた5)西洋新聞から見る19世紀後半の日本の伝統服飾のイメージの変遷について考察した上、朝鮮側の資料から読み取れた6)西洋からみる朝鮮人の服飾観について考察した。

4. 研究成果

第一、西洋人が認識した日本と朝鮮の男性服飾について比較考察した結果、以下のことが解明できた。

まず、西洋人たちは日本の上流階級の装束に施された刺繍の贅沢さや衣服の大きさとかたち、帽子の形態に注目し、日本の装束は西洋服飾より儀礼的な側面を重視するものと認識していたことが明らかとなった。特に、日本使節が着用した狩衣を、外交儀礼に相応しい礼装として高く評価しており、長袴や烏帽子の独特なかたちに注目し、これらを実用性よりも儀礼性を重視する日本の服飾文化の中で生まれたものとして理解していたことが分かった。なお、日本の衣服のかたちが似ているため、アメリカ人は日本使節団の身分による衣服の違いを識別できなかったことも読み取れた。

日本の庶民や下層階級の服装については、露出のある身なりや体に施された刺青に注視した記述が多くみられた。西洋人たちは、露出の多い下層階級の服装を批判しながらも、一方、刺青という手段を用いて、そのような欠点を補う美的感覚を肯定的な目線で捉えていたのである。

次に、朝鮮の上流階級の服飾について考察した結果、西洋人たちは、朝鮮官僚の官服から朝鮮服飾の伝統性を感じており、また、朝

鮮使節がアメリカでの大統領の謁見式で着用した官服を外交儀礼に準じる礼装として理解していた。特に、胸背の独特な図案と刺繍の完成度に注目し、その豪華さを評価していた。なお、紗帽の後頭部の両側にある脚に注視し、忠を重視する朝鮮の儒教的考えが込められたものだとして理解しており、朝鮮の上流階級の服飾を儀礼的な側面を重視するものとして認識していたことが明らかとなった。前述のように、西洋人たちは、日本の上流階級の服飾も儀礼性を重視するものと認識していたので、この点は日朝両国において共通するところである。

さて、朝鮮滞在の西洋人たちは、朝鮮の国王と官僚の服飾のかたちが類似している点を指摘したが、この点も、アメリカ人が日本使節団の服装が似ているので、身分の上下が分からなかった点と共通しており、西洋人が認識した日朝両国の上流階級の男性服飾には、服飾の儀礼性と身分を超えたかたちの類似性という2つの共通点が確認された。

次に、西洋人たちは、官僚の官服を西洋の聖職者の衣服に、袍を西洋のサードリスに類似するものととらえており、一般庶民の袍も西洋の宗教服に類似するものと見なしたことが確認された。それに加え、男性のパジ・チョゴリが洋服と同じく上下2部式で構成されている点に注目していることが読み取れた。

もう一つ、西洋人たちは朝鮮男性の帽子的種類が多いことから、朝鮮は帽子の国だと表現しており、なかでも黒笠は、デザイン性と儀礼性が強調されたものと認識していたことが明らかとなった。既に述べたように、日本の上流階級の男性が被る烏帽子も儀礼性を重視したものと認識されていたので、この点も日朝両国の服飾における共通点であることが再度確認できた。

第二、西洋人が認識した日本と朝鮮の女性服飾の考察結果を示す。まず、日本滞在の西洋人たちは、皇后の宮中の装束を、絵のような美しさだと表現し、日本伝統服飾における刺繍の豪華さや色彩の調和を極めて高く評価していたことが読み取れた。刺繍の豪華さは、既に日本の上流階級の男性服飾でも認められた部分であり、日本の刺繍は、日本服飾の美しさを決定する重要な要素のうち一つであったことが再度認められた。また、皇后の装束に施された天皇家の紋章に注目しており、家紋が日本の衣文化の独自性を表す新鮮なものとして理解されていた様子が垣間見られた。なお、皇后の小袖の襟とサードリスの詰襟との比較を通して、皇后の装束から西洋の宗教服飾との類似点を見出した。朝鮮男性の袍もサードリスと類似したものととして認識されていたので、西洋人たちは、日本と朝鮮の伝統服飾には西洋の宗教服飾の要素が混在していると理解していたことが明らかとなった。

上流階級や一般女性の服飾については、主

として着物に関する記述が大部分を占めていた。着物は着用時に直線的なシルエットを現す形態的な特徴を持つものとして理解されており、日本では上流階級の女性だけではなく、大都会に住む一般女性たちまでが豊かな衣生活を送っていた様子が垣間見られた。特に、日本女性の装いにおける大切な点は、帯にあるという考えが示されており、帯が着物の美しさを表現する重要な役割を担っていると認識されていたことが確認できた。

また、日本女性が伝統服飾を着用する際には、各階級による伝統的な服装様式や着方を固守し、礼儀作法を尊重する衣生活を送っていると認識していた様子が読み取れた。なお、日本の女性は衣服の質や衣服に込められた由来を重視しており、先祖から受け継がれた美しい着物に自負心を感じ、それを大事に継承していくと理解している様子も確認できた。一方、下層階級女性の服装は、野蛮に見えると指摘されており、日本の下層階級の女性の衣服文化を非文明的に認識していたことが窺えた。

次に、朝鮮滞在の西洋人たちは、朝鮮女性の服飾のうち、チマ・チョゴリに関して最も多い見解を示していた。衣服構成という側面で上下2部式のチマ・チョゴリは、ヨーロッパ人の服装に近いものとして認識された。チマ・チョゴリの評価は、着用者の身分によって大きく異なったが、王妃の場合、非常に美しく魅力的な衣服として理解しており、王妃の衣服に対する趣向まで、高く評価していたことが分かった。また、王妃がチマ・チョゴリの着用時に、西洋の時計を身に付けず、ノリゲだけを付けている点を強調し、王妃が朝鮮の服飾文化を固守する点にも注目していたことが読み取れた。

一方、下層階級のチマ・チョゴリについては、賤民女性が着ている胸が露出してしまうチョゴリや汚い衣服から、非文明的で非実用的なものとみなしている見解が多くみられる反面、これは意図的な露出ではない点を主張し、朝鮮の下層女性の衣文化を評価する際に外部の尺度で判断するのではなく、その文化の内部にある尺度をもって、評価している人も見られた。

そのほか、チャンオッに関しても多様な見解が示されたが、衣服を利用して、女性の顔や身体を隠す行為に違和感を覚える西洋人がいる一方、チャンオッは慎みを美德とする東洋的思考のもとで生まれた朝鮮の服飾文化の一部として理解する西洋人もいたのである。

もう一つ、西洋人は、朝鮮から持ち帰りたい、最も魅力的なものの一つは女性の帽子だと記し、西洋のハットとは全く異なるかたちをした朝鮮の帽子こそ朝鮮の特色のよく表れたものだとして高く評価したことが確認された。

第三、西洋人が認識した日本と朝鮮の伝統服飾の長所と短所のうち、まず、日本滞在の

西洋人達が日本の伝統服飾の所長として挙げたことは、1) 着物と帯だけで着装が完成できる点、2) 日本人の体形をカバーし、最も日本人に似合う衣服、3) 西洋服飾より縫製が単純で、簡単に仕立てられる点、4) 着物の袖がポケットの役割まで兼ねている点であった。

朝鮮の場合は、1) 朝鮮の男性の服装の着脱し易さや着心地の良さ、活動性に優れた点、2) オッコルムという結び紐が機能性とデザイン性を兼ねた点、3) 朝鮮の伝統服飾は朝鮮の四季や風土に適合している点、4) 袍の袖が衣服の袖としての役割以外にもポケットやカバンの役割まで担っている点であった。そこで、着物における袖の役割と袍における袖の役割は、両方ともに長所として認められた部分である。

次に、西洋人が認識した日本の伝統服飾の短所は、着用時の不便さが指摘されていた。着物は歩く時も不便であり、帯を締めるのは難しく、身体に圧迫感を与えるものとして認識されていたことが分かった。朝鮮の場合は、朝鮮の衣服の種類が少ないので、スタイルに変化がない点と体形を隠す点が短所として挙げられていたことが判明できた。

第四、西洋人が認識した日本と朝鮮の服色について考察した結果、まず、西洋人達が日本人の服色として最も注目した色は藍染めを施した青色であった。これは男女問わずに愛用された色で、*The New York Times*(1854年7月22日付)の記事“Visit of the American Squadron”をはじめ、イザベラ・バードやラファディオ・ハーンなどの記録からも日本人の衣生活に欠かせない服色として記されており、青色＝日本を表す色として認識されていたことが明らかとなった。

次に、西洋人の目を引いた色は、主として女性の服色として用いられた緋や紅のような紅色系の色であった。バードは、緋色の袴を着用した皇后の姿を記しており、エリザ・シドモアとウィリアム・グリフィスは、未婚女性の肌着の色が緋色であることに注目し、緋色は乙女の印として非常に美しい、と高く評価していた。これらの記録より、緋色は、日本の皇后の装束から一般女性の肌着に至るまで幅広く使われて服色として、西洋人に深い印象を与えていたことが分かった。

また、西洋人は重ね色に注目しており、特に、何枚の重ね着によって袖口から見える多彩な色の調和を高く評価し、それを色から見る日本特有の美しさとして、捉えていたことが読み取れた。

さて、エドゥアルド・スエンソンは、日本人は暗い色の無地の生地を好むと記しており、日本滞在西洋人たちが記した日本の服色の中にも、黄色のような明るい色は見られず、主に紫色や緑色、灰色、空色、白色などが記されていた。白色に関しては、日本国大君の装束をはじめ、花嫁の衣装に用いられており、そのほか、僧侶服や巡礼者の装束、あ

るいは下着の服色として使われていたことが読み取れた。また、ハインリッヒ・シュリーマンは、日本では白が喪服の色なので、白装束で他人を訪れるのは、日本人に対する最大の侮辱だと述べており、服色を通して礼儀作法を表す日本の服飾文化の一面を注目した。この点は、次に取り上げる朝鮮での白色が持つ意味とは異なる部分である。

朝鮮の服色に関しては、白色と多色に分けて分析を行なった。まず、白色について考察した結果、ホレス・アレンは、白色は朝鮮の国色であると同時に喪主が着る喪服の色だ、と記しており、白色が朝鮮を代表する色、王や先祖を敬う哀悼の色として理解され、白色を崇める朝鮮の色文化を熟知している様子が窺えた。また、西洋人の中には朝鮮人の白い服色から清潔さを感じ取っている人がいる反面、違和感を覚える様子も見られた。

次に、多色について考察結果、パーシヴァル・ローウェルは、朝鮮人は色を好む民族であると評価しており、イザベラ・ピショップも白色と多色の調和について肯定的な見解を示した。また、アレンは、子供達の色鮮やかなセクドンの袍によって、新年が素晴らしくなると評価しており、そこから朝鮮特有の色文化を感じ取っている様子が窺えた。

第五、西洋新聞から見る19世紀後半の日本の伝統服飾のイメージがどのように変遷したのかについて、アメリカとイギリスの新聞(1860年から1890年まで)に掲載された日本の伝統服飾に関する記事やイラストから考察を行なった。

その結果、1860年代、西洋の新聞に記録された日本の着物は、男女の区別ができない衣服として認識されていた。また、日本人の下流階級の服飾について、*The Illustrated London News*(1861年8月17日付)の記事“Sketches in Japan”には、“strange looking dresses”と記述しており、日本の伝統服飾について否定的なイメージを持っていたことが垣間見られた。ところが、1860年後半から、日本が西洋社会に自国の文化を積極的に知らせることをきっかけとし、西洋人は日本の伝統服飾について肯定的なイメージを持つようになった。その好例として、*Harper's Weekly*(1868年2月22日付)の挿絵には、伝統服飾を着た日本人男女がバレンタインデーを楽しむカップルとして描かれていた。

特に、これらの変化は、1870年代から1880年代のイギリスの新聞記事を通して確認することができた。1872年8月22日付の*The Times*では、日本を“Eastern Great Britain”と呼び、最高の賛辞を呈しており、日本の伝統文化に深い関心を示していた。1885年には「ミカド」というコミックオペラがイギリス社会の中で大人気を集めていた。これをきっかけとして、1887年には西洋文化の象徴的な行事であるクリスマスにも日本の着物が着用されており、人気のトレンドになって

いたことが *The Illustrated London News* (1月 22 日付) の記事から確認することができた。

また、アメリカの新聞 *Frank Leslie's Illustrated Newspaper* (1887 年 9 月 3 日付) の記事には、日本の相撲、剣道、扇子の踊り子が日本の伝統服飾を着飾っている様子が描かれており、このことからアメリカ人が日本の伝統文化に興味を示している様子が推察できた。加えて、同新聞の 1889 年 9 月 21 日付の記事によると、日本の着物はアメリカの女性らの間でハウスガウンとして支持を得ており、その値段は 150 ドルと記されていたが、これは今日の市価でおよそ 4000 ドルの価値に当たるものである。この記述から着物は当時のアメリカ人が愛好するファッション・アイテムであったことが観察できた。

1890 年には日本の伝統服飾に関する認識が高まっており、着物は男女区別ができる衣服として認識するようになった。さらに、西洋人は日本での洋服化が進むことにより、日本の伝統服飾が消えてゆくことを残念に思っていたことが分かった。以上の考察を通して、西洋人が持つ日本の伝統服飾に関する認識は、1860 年代の否定的なイメージから徐々に肯定的なイメージに移っていたことが明らかとなった。

第六、西洋人が認識した朝鮮人の服飾観について考察したところ、朝鮮人は伝統を固守する服飾観を持つ民族であると理解されていた様子が窺えた。また、朝鮮人における服飾というものは礼を具象化したものであるという考えが示されていた。特に、ローウェルは、朝鮮人にとって服飾は人の真義を表現する最も重要な部分になっていると分析し、衣服を通して礼を表わす朝鮮人の考え方に深い共感を示していた。ウィリアム・カルスも猛暑のなかで身なりを整えている朝鮮男子の礼儀作法に注視しており、ジョージ・ギルモアも衣服を通して、王に礼を示す朝鮮の民衆の姿に感心を示し、朝鮮人における衣服は礼儀に繋がるものであると理解されていたことが分かった。なお、ジェームズ・ゲイルやカルス、アレン、ギルモアの記録を通して、西洋人のなかには、朝鮮人が清潔さを重視する服飾観を持っていると認識していた様子が読み取れた。

服飾観にはその民族の特徴や考え方の一面が投影されていると言えよう。朝鮮滞在の西洋人達は、朝鮮固有の服飾文化に対する理解を踏まえた上、朝鮮人は衣服を通して伝統を固守しながら、礼を表明し、衣服の清潔さを重視する服飾観を持っていると認識していたのである。

以上のように、本研究では、19 世紀後半の西洋人が当時の日本と朝鮮の伝統服飾についてどのように認識し、評価していたのかを明らかにした。

異文化理解・多文化共存というフレーズが国際社会を支えるキーワードになっている

今日、自国の固有の文化としての伝統服飾を、他者がどのように認識していたかを究明することは、今後、自国の伝統服飾を大衆化・世界化していく上で、重要な意味を持つものとなり、その意味で本研究の成果が一つの指針になれると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件：掲載 2、審査中 1)

Jung Eunji, The Study of the late 19th Century Traditional Japanese Costume from the Western Perspective, *Bulletin of The Faculty of Human Culture and Science Prefectural University of Hiroshima*.2016, 11, 149-161

鄭銀志, 西洋人が認識した朝鮮時代末期の伝統服飾に関する研究, 国際服飾学会誌, 2016 年 6 月 49, 4-23,

鄭銀志, 西洋から見る 19 世紀後半の日本と朝鮮の伝統服飾に関する比較研究, 日本家政学会誌 (2017 年 6 月現在、審査中)

〔学会発表〕(計：5 件)

鄭銀志, 西洋から見た朝鮮時代末期の服飾文化—19 世紀後半から 20 世紀初に書かれた西洋人記録を中心に—, 日本家政学会中国・四国支部研究発表会 (2014 年 10 月 5 日)

Jung Eunji, The Study of the late 19th Century Traditional Japanese Costume from the Western Perspective, *Pacific Lutheran University (East Asian Cultures)*, the United States (2015 年 9 月 10 日)

鄭銀志, 西洋人の記録から見る 19 世紀後半の日本の伝統服飾—1850 年代から 1890 年代までのアメリカとイギリスの記録を中心に—, 第 62 回 日本家政学会中国・四国支部研究発表会 (2015 年 9 月 20 日)

Jung Eunji, The Study of Traditional Japanese Costume Image Changes in the late 19th Century from the Western Newspapers, *International Costume Congress-East Asian Aesthetics and Future Fashion*, Seoul Baekje Museum, Korea (2016 年 8 月 25 日)

鄭銀志, 19 世紀後半の西洋から見る日本と朝鮮の伝統服飾に関する比較研究, 第 63 回 日本家政学会中国・四国支部研究発表会 (2016 年 10 月 2 日)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

鄭 銀志 (Jung Eunji)
県立広島大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：2 0 3 9 8 8 8 7